

## 地方から見えてくる日本体育史

大久保英哲 (OKUBO Hideaki)

### History of Physical Education in Japan from a Regional Perspective

#### はじめに

筆者は大学院時代、1960～70年代の西ドイツ（当時）のスポーツ教育の導入過程の解明に取り組んだ<sup>1),2)</sup>。その際西ドイツは連邦国家であり、伝統的に各州独自の文化的権利が尊重される文化連邦主義があって、各州の分析と総合を踏まえないと、西ドイツ全体をナショナルな形で論じることはできないという基本的視点を教えられた。それまでの小国家分立の歴史的背景から、各州・地域で、例えば南のバイエルン州と北のハンブルク州では教育や文化の状況が異なっているのである。

その後、赴任先の学部長であった日本史学の高橋富雄氏（1921–2013）に接し、「東北史学」と呼ばれる氏の歴史研究法に触発を受け、自らの研究スタイルに秘かにその手法を取り込みつつ、勝手に「地方からの近代日本体育史」を標榜してきた。ドイツの場合と基本的に共通する研究視座を見たからである。わけても、氏がNHK市民大学講座『地方からの日本史』<sup>3)</sup>に書かれた「花綵列島の名にふさわしく」の文章は、30年を経て、いまだに私の心を捉えて離さない。

「（日本列島は）北は千島列島から南は沖縄列島に連なって、美しい円弧ないしは弓形を描く地形が、まるで花で飾ったように美しい姿であるというので、そう名づけられたのだそうです。Festoon Islands. そうなのだ。英語の呼び名まで教えられて、中学時代の私などは、その名に陶醉したことさえある

のです。この名前通りの日本史にしたい。それが私の希望です。この日本においては、どこもそれぞれに大事なので、どこは欠けてもいいという所はひとつもないのです。でもこれまで日本史はそうなっていません。ミヤコ、中央、先進。大体はそういうところでできあがってしまっているのです。ヒナ、田舎、地方、そういうところは、時たまお相伴にあずかる程度なのです。こんな日本史になっているのは、歴史の学問がヤマト日本だけ美しいと考えて、花綵列島がもっと美しいのに気がつかなかったからです。この講座は、その花綵列島日本史のバランスを回復するための地方からの試みです。」

確かに、日本体育史、特に近代以後は、「中央」「東京」「文部省」という言葉がまず浮かぶ。池の中央から発せられた衝撃が波紋となって次第に外側に広がる姿として地方が措定される。周縁にあるほど「遅れた」「後進」地方とみなされる。さもなければ、その裏返しのように、国民体育大会終了後とか各地の紀年を節目に刊行される各県体育スポーツ史などには往々にして「郷土自慢」的な体育・スポーツ史記述がみられる。

偏狭な郷土愛と権力者賛歌を中心としたいわゆる「郷土史」ではなく、地域で確認できる史料のみを重視する「地域独善主義」でもない、ましてや「中央の下請け史」でもない地方からの日本体育・スポーツ史を如何に構築するか。これが筆者の研究主題である。

## 1. 中央とのダイナミックな関係からみる地方史研究

筆者は、これまで主に近代日本の体育・スポーツ史を扱ってきたが、地方と中央の関係を平板な中央依存の制度史から、中央とのダイナミックな緊張関係を持って形成される地方史研究<sup>4)</sup>へと視点を変えなければならないとの立場に賛同してきた。これは一見すると中央集権的な体育・スポーツの国家政策が各地方に下達される図式に見えるにしても、各地方の対応は決してそう単純ではなかった。賛成と反対という二つの極に含まれる細かな位置を揺れ動きながら、結果として国の政策を受け入れてきたのであり、そうした地方の動向が国の政策に一定の影響を与えた例さえ見られる。このように、地方個別史は全体史との往還運動の視野を持たねばならない。またそうした揺れ動きそのものが、地方の特色を浮き彫りにする。

## 2. 人々の顔の見える地方史

第2に、文書館、資料館の整備によって、各地方には地方文書、民俗資料、通俗民衆本、生徒作文など、日常史や心性史といった社会史的史料が比較的豊富に発掘できる可能性が増えた。例えば、「兵式体操」(歩兵操練)は、明治の天皇制中央集権国家による富国強兵主義の貫徹に伴って、学校教育にも軍事訓練が要求される中で導入されたとする見方が一般的であるが、地方側の史料からこれを丹念に見ていくと、若干別な様相を見せる。

明治15年「岩手県年報」は、岩手師範学校に関して次のように述べる。「師範学校ニ入ル者ハ概ネ二三男ニシテ其入学ヲ以テ徴兵ヲ免レント図ル者ニシテ此徒ノ志ス所ハ急養速成ニ存テ学識蘊蓄ニ念ナク競フテ初等科ヲ収メ中等科以上ニ志ス者ナキニ至ラントス」<sup>5)</sup>。また福島師範学校などでも、明治15年には「入学希望者がなくて教諭訓導は県内に出張して生徒募集をした」が、明治16年には「37名の入学希望者に対して実に140名の応募者があって、学校がほくほく喜んだ。之は徴兵

令の改正で、師範入学者は猶予されるという特典が出たからであった。地方の金持ち息子が慶応大学をやめてくる、中学校をやめてくる、東京方面から続々やってきたので、師範はブルジョアの子弟と秀才の集団となった」<sup>6)</sup>。明治16年の徴兵令改正は、常備軍を増強するとともに、国民皆兵主義の原則を強化し、代人料・家事故障による免役を廃止、すべて猶予性に変更した。その猶予条項も厳しく制限された。そのような状況下で「官立学校卒業証書を有するものにして官立学校教員たるもの(第3章18条2項)、「中等学校以上の官立学校の歩兵操練科卒業証書所持者」(第2章12条)は、事実上徴兵免除となったのである。この改正は当時の地方中学校・師範学校の特典をいっそう際立たせ、岩手県学事報告も「師範学校は県立一か所あり。校長は森中和氏、教員は東京師範学校中学師範学科卒業生二名、その他の人々にして、彼の徴兵令改正ありし以来入学を請ふもの続々あるよし…徴兵令改正ありし以来卒業証書に価格を増したるが如し」<sup>7)</sup>と述べる。

当時の地方中等学校の基本的性格について、本山<sup>8)</sup>は国家のための教育機関であるよりも、地方のための教育機関であったと述べる。各地方の府県では、自らの管轄する中等学校に徴兵猶予の条件を整備する対応を急いだ。それが、「歩兵操練科」を体操科に追加実施するという程度の比較的簡単な施策で合法的に解決できるのであればなおさらであった。文部省に先行する各地方の歩兵操練科実施の動きは、こうした状況下で生じたものであり、文部省はその後明治19年の「学校令」によって、その統制と標準化を行ったのである。文部省は潜在的な徴兵忌避者として入学してきた生徒たち、とりわけ師範学校の生徒たちに対して、一見矛盾する徹底した軍国主義教育を施す専門家の義務を課した。即ち、政府も師範学校入学者とともに徴兵忌避を意識し、相互に利用しあっている状況を作り出したのである。結果的に、師範学校の生徒たちや卒業生たちは、自らの徴兵忌避意識を、兵式体操に代表される学校での疑似兵営体験と、軍国教育を施す専門家の義務に置き換える

ことによって、自らの内面的葛藤を合理化せざるを得ない立場に立たされたのである。こうした微妙な心理構造は、後に表裏二面性を持つと言われる「師範タイプ」と呼ばれる独特の教師像を形成するうえで、大きな役割を果たしたと見ることはできないだろうか<sup>9)</sup>。

### 3. 地方から見えてくる日本体育史の地平

地方からの体育史研究によって新たに何が見えてくるのか、どのような成果を得ることができるのか。これまでの研究の中から具体的な例で見てみたい。

#### (1) 新史料の発掘

そのひとつは新しい史料の発掘である。その中には地方にとって意味があるばかりではなく、日本体育史全体にとっても大きな意味を持つものがある。一例として*Every boy's book*をあげる。

現在岩手大学附属図書館に、旧岩手師範学校所

蔵として*Every boy's book*が所蔵されている。ロンドン、Routledge社発行、第15版、1884年刊行である。(初版は明記されていないが、1856年とみられる)。現在、第15版が東北大学に、第16版が京都大学・日本体育大学・福岡教育大学等に所蔵されている。今村<sup>10)</sup>、大場<sup>11)</sup>によれば、体操伝習所が体操参考書として購入した書である。その購入記録は見られるが、体操伝習所の後身である筑波大学にも所蔵されていない。この本がどのような経緯で岩手師範学校に残されているのか。筆者の日本体育史研究は当初この疑問と探索から始まったといつてよい。

明治14年9月、体操伝習所第1回卒業生原収造が岩手師範学校兼中学校三等教諭として着任した。以後2年あまり、体操伝習所と緊密な連絡を取りながら、屋内体操場の整備、教則の整備、唾鈴・棍棒などの体操用具、フットボール、活力器械の購入・整備など、目覚ましい体育活動を展開して、明治17年3月、文部省御用掛として体操伝習所教官に戻った。原は体操伝習所入学以前、東京三田慶応義塾で2ヶ年半英学を学んで明治9年に卒業しており、英語に堪能な人物であったとみられる<sup>12)</sup>。岩手師範学校における購入記録が不明であり、また体操伝習所の蔵書印刻が見当たらないため、推測でしかないが、原が体操伝習所から研究調査のために*Every boy's book*を託されて岩手に赴任、母校に戻る際に何らかの事情で持ち帰らなかったというのは、筆者の楽しい想像である。ともあれ、体操伝習所が研究したスポーツと娯楽 (a complete encyclopaedia of sports and amusements) を知る上で本書は貴重な史料である。また岩手県文書によって明らかになった原収造の具体的な体育活動は、当時の体操伝習所卒業生に期待され要請された体育活動の内容を知る代表的な事例である<sup>13)</sup>。

#### (2) 地方の特色の解明

次に地方の特色を解明する体育史研究について、加賀(金沢)藩騎兵隊の例をあげたい。

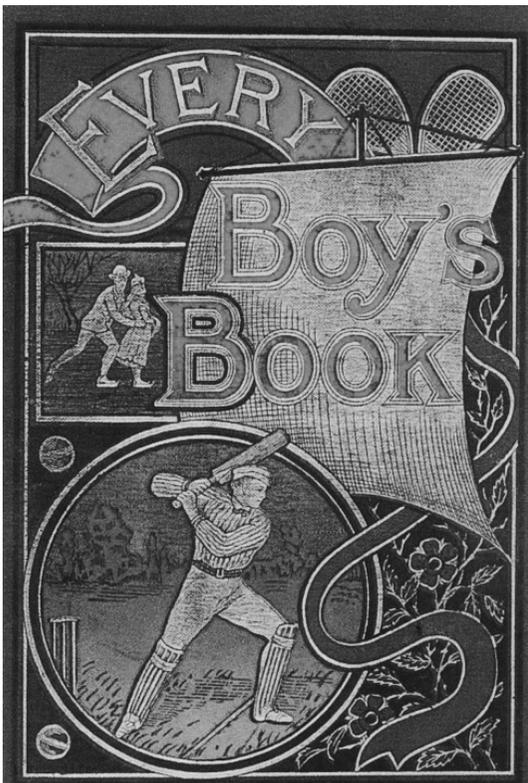


図1 *Every Boy's Book* (岩手大学附属図書館蔵)

### ①幻の加賀（金沢）藩騎兵隊

金沢城二の丸馬場の松風に乗って、かん高い馬のいななきと共にりんとしたフランス語の号令が響き渡る。

「プレパレウ・フルモンテ・アショパール」（乗馬用意）。

羽根飾りのついた帽子をかぶり、肩章の付いた詰め襟えりの上着とズボンをつけた8人の加賀藩兵士は、馬の左脇に立って、両肩を後方に張り、手綱を馬の口から16センチほどのところで握りしめた。

やがて、「ショパール」（乗馬）の号令で左足先三分之一を鐙に入れ、いっせいに軽やかに馬にまたがったと思うと、「マルセー」（進め）の声と共に8頭の馬は右まわりに一列縦隊となり、トロット（並足）で進んでいく。周囲を高さ七尺五寸（約21尺）の板で囲われ長方形の馬場は長さが48間（86m）、幅24間（43m）。二枚開きの扉がついた二箇所（43m）の出入り口がある<sup>14）</sup>。

これは、筆者のフィクションである。だが、加賀藩資料によれば、慶応3年6月には「加賀藩

騎兵隊を起こ」し、「騎兵稽古馬場を堂形馬場に開」いており、金沢市立玉川図書館近世資料室加越能文庫「渡辺庸旧蔵」文書の騎兵訓練関係資料として、フランス陸軍をモデルにした騎兵操練書が8種11冊と大量に残されている<sup>15）</sup>。冒頭の馬場構造や服装は『乗馬生兵教練』、号令と動作は『仏人フリー伝習テオリ』に記載されているものである。

従来、これらは西洋馬術書だとされてきたが、その由来は不明であった。筆者は1990年にこれらに目を通し、その中の林正十郎『木馬之書』に着目した。表紙に「原書ハ佛国兵学校身體運動学書中ノ抄訳ナリ」とあったからである。

### ②林正十郎と仏式伝習

林正十郎（1824－1896）は摂津国（大阪）に生まれ、村上英俊にフランス語を学び、蕃書調所手伝、1866年に開成所でフランス語の教授に就任した。



図2 『乗馬生兵教練』騎兵図（金沢市立玉川図書館蔵）

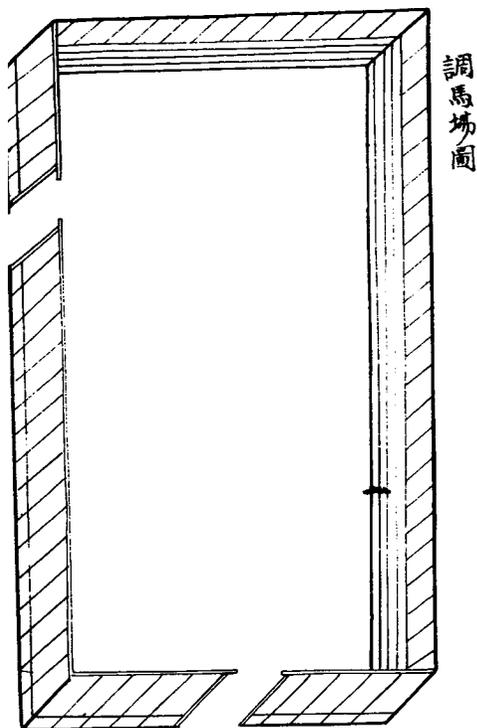


図3 『乗馬生兵教練』調馬場ノ図（金沢市立玉川図書館蔵）

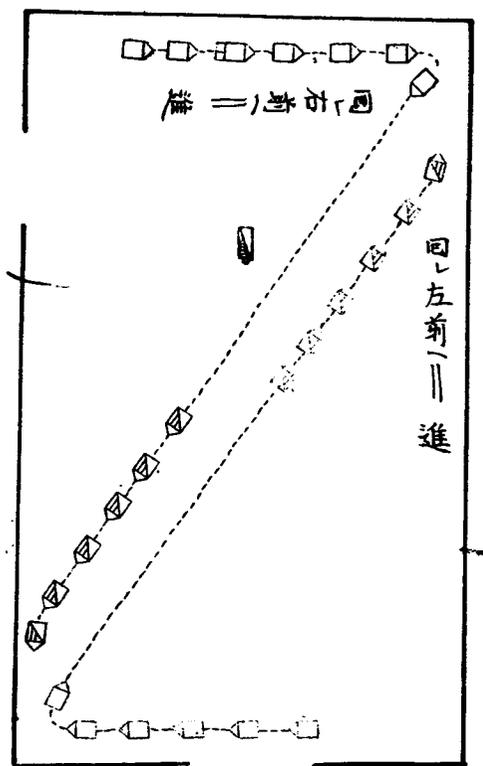


図4 『仏人フリー伝習テオリ』乗馬運動図  
(金沢市立玉川図書館蔵)

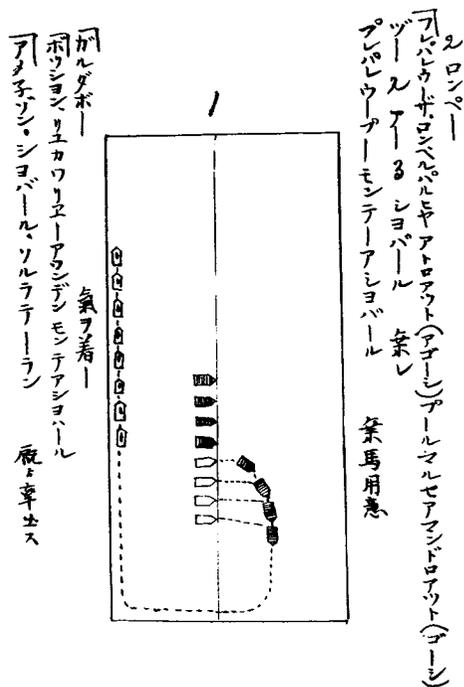


図5 『仏人フリー伝習テオリ』乗馬号令  
(金沢市立玉川図書館蔵)

さて、1867年、幕府の要請により、横浜にフランス軍事顧問団が到着した。フランス軍事顧問団は、シャノワン (Charls Chanoine、1835-1915) を団長とする15名 (後に増派されて最終的に19名) から成るミッションであった。彼らは横浜の兵営「太田村陣屋」に入り、「仏式伝習」と呼ばれる歩兵・砲兵・騎兵、すなわち三兵の訓練に入った。

そして、幕府の浮沈をかけたこの仏式伝習にフランス語通訳として派遣されたのが、開成所教授の入江文郎 (1834-1878) と林正十郎であった。

仏式伝習が開始されて間もなくの頃とされているが、シャノワン団長から幕府宛建白書が提出された。要するに、日本の兵隊は体を動かしながら、基礎体力がない。体を自由に動かし、動作を活発にするためには「練体法」なるものが重要だ。走ったり、飛んだり、飛び降りたりなど、そ



図6 林正十郎  
(富田仁『フランス語事始』NHKブックス、昭和58年、205頁より)

れをさまざま行わせている。馬の上でもさまざまな運動を行う。家来の中にそうした書物を持参している者がおり、自分自身は詳しく見たことはないが、その書には絵図等も詳しく載っていると聞いている、という内容である。

林正十郎『木馬之書』はこの建白書にある彼らが持参した書の抄訳の可能性が考えられ、その原典を探索する研究が開始された。

### ③『木馬之書』と『アンストリュクシオン』

『木馬之書』には「馬尾上より飛越る業」12挙動、「馬の側方より飛越る業」5挙動、合計17種類の木馬運動が運動方法、発声法、などとともに記載されている。例えば、「第一挙動 馬尾上に身体両脚及び両手を挙げ重ねて後方に退飛するなり。即第一図abcの如し」である。これに相当する記述が見られ、ほぼ原典と確定されたのは、1847年初版発行、フランス陸軍省『軍隊のための体操教本』(*Instruction pour l'enseignement de la gymnastique*) (以下『アンストリュクシオン』)であった(但し版は未確定)。全文200頁

の本文は3部構成(第1編「一般規則」、第2編「基本の演習」、第3編「応用演習」)のほかに33種(35個)の体操器具・器械図やそれらを用いた各種運動法の図、器械器具を配置した200ないし300人対応の屋外器械体操場設計図など合計18枚の付図がある。1ベルト、2連鎖状走路、3紐付き球、4投鉄棒、5ミル、6ポアニエ牽引具、7アル・ブータン・押し具、8索、9高跳び、10跳躍台、11木馬、12水泳台、13初級用梁木、14上級用梁木、15濠、16傾斜円木、17遊動円木、18吊り下げ棒、19棚、20登り棚、21アモロス鉤竿、22垂直マスト、23オクトゴン、24溝付板壁、25可動平行棒、26固定平行棒、27石・杭サークル、28石サークル、29高足、30飛び棹、31壁棚、32登攀用円木、33水平円木、34遊動円木、35走路 である。

第1編は「一般の規則及び教導の区分」、第2編は「基本演習編」として、明治7年にエシュマン訳述・曾我準佑筆記 陸軍省『体操教範』としてほぼそのまま訳されている。図も顔が日本人風に変更されているほかは全く共通である。そしてこの陸軍省『体操教範』は1860年版『アンストリュクシオン』に基づいていると明記してある。

第3編「応用演習」は、①壕・溝等の障碍越



図7 『木馬之書』(金沢市立玉川図書館蔵)

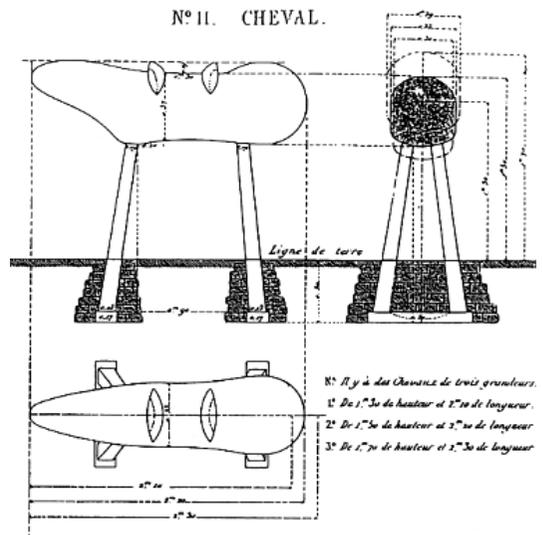


図8 『アンストリュクシオン』木馬構造図

え、②梯子 (escalades)、③走 (des courses)、④曲乗り (voltige) に分かれている。さらにこの④曲乗り (ボルティージュ) という運動は、①円木の上、②平行棒上、③吊り小鉄棒 (トラペ)の上、④木馬上 の4つに区分されている。『木馬之書は』この木馬上で行う曲乗り (ボルティージュ) 部、約20ページ分を訳したものである。なお、木馬は小 (高1.3m、長2.1m)、中 (高1.5m、長2.2m)、大 (高1.7m、長2.3m)、があり、鞍に相当する取っ手がついている。

また『アンストリュクション』は、例えば城を攻め落とす場面を想定し、その際必要となる各種の運動を体系的に配置するなど、実用・実践的である。したがって、例えば高い横棒にぶら下がって、そこから逆上がりでよじ登る、前回り下りをするなど、現在の鉄棒運動と同じ技もあるが、鉄棒運動と異なるのは、上がり技と下り技、移動技だけで、回り技は一切ない。このように実用的でかつ、兵士の身体運動訓練のための総合体育書である<sup>16)</sup>。

#### ④大阪兵学寮

1868年幕府の瓦解、戊辰戦争の勃発と共にフランス軍事顧問団との解約がなされ、仏式伝習は中止された。フランス軍事顧問団の中には帰国した者のほか、ブリュネ大尉など5人が幕府方について函館戦争などに参加し、敗色濃厚となった5月2日、フランス船で箱館を脱出している。函館戦争の後、本国で陸軍勤務に復帰したブリュネ大尉を除き、ビュフィエ軍曹、マルラン軍曹、フォル

タン伍長は、明治3年、兵部省に雇われ、大阪 (大坂) にあった兵学寮の教官となった。しかし明治4年12月には兵学寮が東京に移され、わずかな期間しか存続できず、基本資料もきわめて少ないため、「幻の兵学寮」と呼ばれている<sup>17)</sup>。

兵学寮ではフランス陸軍の兵術書の研究、翻訳が精力的に進められていた。現在内閣文庫等に兵学寮の手になるとと思われる『歩兵操典』など数十点に及ぶ翻訳和本類が残されているが、の中には『アンストリュクション』はない。

#### ⑤加賀藩の騎兵隊構想

さて、加賀藩では幕末に独自の騎兵隊を構想したと見られる。慶応3 (1867) 年6月2日には「加賀藩騎兵隊を起こさんとするを以て馬匹及び馬場に関する調査」が始まり、6月28日には「騎兵稽古馬場」の開設告示がおこなわれた。さらに8月には「騎兵稽古の為江戸に派遣志望を募集」し、家臣3名が横浜に派遣されることになった。もともとこの時点では英国式のつもりであったようであるが、幕府ではすでにフランス式陸軍を範とすることになっていたため、慌てて国許へ「仏式歩兵隊業」伝習に変更するむね連絡している。横浜派遣であり、大田村屯所で行っていた仏式伝習へ参加したものと見られる。

家臣3名がいつ帰国したのかは明らかではないが、明治元年12月には藩校経武館で銃砲教練の改革が行なわれ、「且西洋馬術稽古も御取立」になっている。明治4年の金沢藩 (加賀藩) は仏式2大隊 (兵1280人) と英式1大隊 (兵600人) が混成された編成となっている様子に加賀藩資料から読み取れる。

#### ⑥金沢 (加賀) 藩と大阪兵学寮

明治2年に大阪に開設された兵学寮は金沢に最も近い兵学校であり、加賀藩は大量の伝習員派遣を行なった。明治3年には大阪兵学寮生徒総数317人中、金沢藩士が55名を占めている。そしてさらに大阪兵学寮を模倣した斎勇館を金沢城内に設立するなど、きわめて大きな影響を受けた。「大阪御手留抜書 大阪兵学寮に関する件」は明治2年から4年までの大阪兵学寮の加賀藩関連記

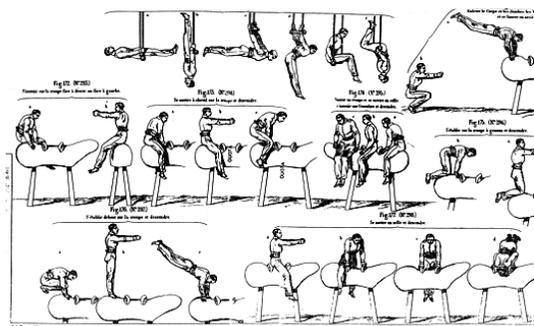


図9 『アンストリュクション』木馬運動

事を29丁にまとめた覚えであるが、この中に出てくる派遣予定金沢藩士数は延べ85人に及んでいる。

### ⑦金沢城二の丸に仏式士官養成所「齋勇館」の設立

こうして加賀藩は、明治3年10月27日、金沢城内二の丸に大坂兵学寮を模したフランス式軍制の兵学校「齋勇館」を開設した。

「今般士族卒を以兵隊編入可致旨兵部省より被仰出候趣も有之因而近々無隊可致編成に付而は坂府兵学寮の御規則に模擬し、二の丸におゐて屯所規則相立入塾処開所いたし候条、旧新士族一同歳十八歳から三十五歳迄之者入塾修業可申付き候」（大阪兵学寮御手留抜書）

校長は大坂兵学寮に派遣された藤勉一こと杉村莊太郎（寛正）であり、明治4年の齋勇館教授役員は57人にのぼっている。

なお、現在35条からなる「齋勇館規則」が残されているが、これは大阪兵学寮をモデルにして定めたものとあり、大坂兵学寮規則を推測する有力な資料となる。

### ⑧幻の加賀藩騎兵隊

加賀藩に『木馬之書』をはじめ騎兵操練に関係した幕末仏式伝習資料が残されているのは、「齋勇館」における騎兵訓練準備のためであったと思われる。ただそれが横浜の仏式伝習から直接招来したものか、大阪兵学寮経由で招来したものか、あるいは加賀藩が林正十郎等に独自に依頼したものであるかまでは不明である。いずれにしても加賀藩は幕末以後急速に洋式軍制改革に取り組み、「仏式伝習」に由来する仏式騎兵隊への関心を強め、その創設に着手していたことが分かる。フランス人たちは仏式伝習の中で、騎兵の整備は馬匹蕃養などの問題もあって、しばらく時間を要するという見解を表明したが、加賀藩は財力に物を言わせて、その整備に取り組んだと思われる。明治3年10月に金沢城二の丸に設立された士官養成学校「齋勇館」がその拠点であった。順調に推移すれば、間もなくにしてフランス式の軍事訓練と騎兵訓練、その前提となるフランス式の器械体操場

と『アンストリュクション』に基づいた体育指導風景、フランス馬やその厩舎も出現したと見られるが、およそ半年後、明治4年7月、廃藩置県の詔書が出された。「齋勇館」の存在基盤としての藩が一挙に瓦解してしまったのである。おそらく数年早ければ本格的なフランススタイルの加賀藩騎兵隊と体操場風景が金沢城内二の丸に出現していたかもしれない可能性は、ここに幻と化したのである。

この加賀藩騎兵隊がいつ、誰によってどのような構想され、どのように実行に移されていったのか、その経費等はどのように賄われようとしたのか、などはほとんど明らかになっていない。まずは基本史料の収集が不可欠である。このことも含めて現段階では「幻の加賀藩騎兵隊」であり、今後の解明が必要である。幕末から明治維新期に全国に先駆けて騎兵隊の創設に動いた加賀藩は、こうしてフランス式の体育法とも接点を持ったことになる。

### 終わりに

このように地方からの日本体育史研究は、新史料の発掘、人々の顔が見える体育史、地方の特色の解明、そしてそこから通説の修正へと迫る可能性を持っている。

筆者は、歴史は史料を手がかりに、実証という万人にとって認識可能な、したがって合意可能な方法を用い、意識ないし無意識下にある過去のできごとを再構成して再現実化することを目指す学問であると考えている。ものごとやできごとに対する夢でもなければ、むき出しの立場の主張ないし要求の場でもないと考えている。また「花綵」のどこが欠けてもいいというところはないと言いながら、筆者の研究はごくごく一部のわずかの花飾りを確かめたに過ぎない。生涯をかけても網羅することはできまい。筆者はその前途遼遠なることを思いながらも、焦らず一つ一つの花飾りを手にし、全体を確かめていくほかはない。

## 注および引用・参考文献

- 1) 大久保英哲「スポーツ教育の動向：西ドイツの教科スポーツを中心に」『学校体育』35(1)、1982年、37-42頁
- 2) 大久保英哲・成田十次郎「ドイツのスポーツ科における選択制の現状と課題」『学校体育』37(3)、1984年、63-68頁
- 3) 高橋富雄『地方からの日本史』、NHK市民大学講座、NHK出版、1987年
- 4) 戸田金一「秋田県を主例とする学制実施過程の研究」、筑波大学学位論文、1986年、44-56頁
- 5) 岩手県年報、文部省年報、明治15年、459丁
- 6) 『福師創立60年』、21頁、平田宗史「明治前期の教員養成と徴兵免疫規定」、教育史学会紀要『日本の教育史学』第9巻、1966年、47頁より引用)
- 7) 「岩手県学事」、大日本教育会雑誌、第12号、明治17年10月31日、75-76頁
- 8) 本山幸彦(編)『明治前期学校成立史』、未来社、昭和40年、7頁
- 9) 大久保英哲「地方から見た近代体育史上の歩兵操練・兵式体操」、成田十次郎先生退官記念論集『体育・スポーツ史研究の展望：国際的成果と課題』、不昧堂、1996年、369-387頁参照
- 10) 今村嘉雄『十九世紀に於ける日本体育の研究』、不昧堂、昭和42年、881頁
- 11) 大場一義「体操伝習所図書台帳記載の遊戯書」、未公刊
- 12) 原収造「原収造履歴書」(日付なし)、高等商業学校(文部省)宛
- 13) 大久保英哲「体操伝習所卒業生原収造の岩手県における体育活動について」、体育学研究、32(1)、昭和62年6月、11-24頁参照
- 14) 大久保英哲「金沢(加賀)藩に見るフランス軍事顧問団の影：幻の加賀(金沢)藩騎兵隊」、金沢市史編さん委員会『市史編さんかなざわ』8号、2000年、6-7頁
- 15) これらの書名をあげる。①「軍術叢談」：仏式兵術、陸軍の兵制・兵器解説 ②「騎兵操練書等」：馬上教練の内乗馬生兵教練2冊、騎兵操練書附属・新馬の乗込 ③「騎兵徒歩演習」：小隊教練 ④「騎兵徒歩演習」：第2巻第3・4教 ⑤「騎兵生兵訓練」：洋式馬術教練法図解 ⑥「仏人フリー伝習」：乗馬姿勢、馬術用語、号令 ⑦「乗馬生兵教練運動図」：洋式馬術運動図 ⑧林正十郎『木馬之書』
- 16) 大久保英哲「日本近代体育史における林正十郎『木馬之書』(推定1967年)の意義」、『体育学研究』38(3)、1993年、157-173頁参照
- 17) 柳生悦子『史話幻の陸軍兵学寮』、1983年、六興出版
- 18) 大久保英哲「大坂兵学寮における仏式伝習と加賀藩：金沢藩『大坂兵学寮御手留抜書』を中心に」、金沢大学教育学部紀要、人文科学・社会科学編、第45号、1996年、21-39頁参照